

平成19年
1月号

250円

やすらぎ

人と人をつなぐ月刊総合誌



意見を聞くこと
歴史は警告を含んだ出来事によって構成される

リダ(甘受)ー2

言葉とハートのコネクション

共通する言葉～イスラーム教徒とキリスト教徒の間で
「ストーリー・オブ・ラブ」 The Story of Us 26
使うためにあるものを、使わないようにする時

「言葉は、限りなく慈悲深いお方が人々に与えられた最上の贈物の一つである。人は言葉によって人間であることを謳歌し、言葉によって真実に近づく。言葉によって未来の世代と共に生きる。言葉を乱し、仲間内でしか使えない隠語のようになっている人々は、自分のしていることがどれほどの背信行為か気づいているだろうか。」p. 4



人が一対一で向き合った時に心地よく感じる距離は、民族によって異なり、日本人は相対的に遠目を好むと言います。様々な国を旅行したことがあります。接近して話しかけてくる人に圧迫感を感じたり、また男性同士が年齢に関わり無く腕を組んで歩く姿に驚かされたりします。同性同士が抱擁しあって挨拶する国では、当初戸惑って腰が引けてしまいましたが、慣れると相手に対する親近感が増すようにも思え、日本人が淡白すぎるのかなという気もしてくるのでした。

このように身体表現を含めたコミュニケーションの仕方はお国柄が反映されるもので、優劣をつけられるものではありません。しかし欠かせないものがあります。それは心です。友人を思いやる心、客人をもてなす心、家族や親戚付き合いを大切にす心、違いを認める心・・・、こうして様々な心のあり方がいかに深いか、いかに温かみがあるか、いかに純粹であるかによってコミュニケーションを通じて伝わるもの、得られるものは変わってくるのです。反対に、いかに礼儀正しくても心がなければその礼儀正しさも逆効果になりかねません。

新年、新たな気持ちで友人、知人と出会う機会の多い季節です。「今年も宜しくお願いします」という言葉に込める気持ちを大切に持ち続けられたらと思います。2007年も皆様にとって素晴らしい年となりますよう、心からお祈り申し上げます。



編集部より	2
意見を聞くこと	3
歴史は警告を含んだ出来事によって構成される	3
祈りのある毎日へ	5
ゴマの焼き菓子	5
リダ(甘受) - 2	6
信頼できるということ	10
言葉とハートのコネクション	13
年老いた人々へのメッセージ	15
共通する言葉～イスラーム教徒とキリスト教の間	20
「ストーリー・オブ・ラブ」 The Story of Us	26
使うためにあるものを、使わないようにする時	28





意見を聞くこと

意見のやりとりは、限られた知恵、限られた思考を無限にまで高める重要な手段である。

意見のやりとりほど豊かな国家はなく、意見のやりとりほど強い軍隊もない。

教友たちが賞賛される時、他のどの特性でもなく、「彼らは全てのことを、相談しあうことを経て行なった」という特性によって思い起こされる。

利口な人よりももう数歩分、利口な人とは、他人の知恵や考えに重きを置く人である。

考えのさびを落とす最良の特効薬は意見のやりとりをすることである。

二つの知恵は一つの知恵よりも尊いものであり、何百もの知恵はさらに一つの知恵よりも尊い。意見を聞くとは、知恵が集合することを意味するのだ。

自分の知能を信用し、他人の考えを問わない人は、天才的な頭脳の持ち主であったとしても、判断に深さを獲得させるものである相談を放棄しているという点で、知恵のない者と見なされる。

歴史は警告を含んだ出来事によって構成される

歴史的な出来事が全く同じように繰り返されると見なすことは誤りである。似ている点はあったとしても、全ての出来事は時代や周囲の状況に束縛される。だから歴史から何かを学ぶというよりも、警告を得るべきなのである。

日が昇り、日が沈むところにあるあらゆるものは、その最初の新鮮さを守ることをなしえない。

永遠に頂点で留まり続けることのできた人も、国家も、一切存在しない。

人は歴史の、楽しく気分よい部分のみでなく、少しは恐ろしく、怖い部分をも読むべきであり、それによって必要な警告を得なければならない。そうでなければ人はその思考において子供っぽいままにいるだろう。

約束

1000回約束をするよりも、1回約束を守る方がよい。

約束を守ることは、人であること、そして人々の価値を知ることからくる必要性である。

安定なく彷徨う基盤の上では何もなされない。同様に、落ち着きなく彷徨う人も何かを成し遂げることはない。

約束を守ることへの注意深さは信仰から、約束を守らないことは信仰が本物でないことから生じるものである。

一部の人は一生を通して、彼らの良心でなされた約束を守るために努める。一部の人はこのような約束を知らないまま過ごす。そう、この点で信者と偽信者は区別されるのだ。

彼は約束したのに守らなかった、と言わずに、自分が約束したのに守られなかった事ごとについて考慮下さい。人間らしく振舞わなかった、と誰かを非難してはいけない。あなたが人間らしく振舞うべきなのに逃してしまった機会を思い起こして下さい。

目的と手段

正しい目的へは、不正な手段で到達することはできない。そこで用いられる手段は必ず正しいものでなければならない。

不正な手段

偽りや誇張の上に造られたシステムは、例え長い寿命を持つものであったとしても、遅かれ早かれそれを守ろうとする人々の頭上に崩れ落ち、消え去る。つらい夢、空想として残るのみである。

言葉

言葉は、限りなく慈悲深いお方が人々に与えられた最上の贈物の一つである。人は言葉によって人間であることを謳歌し、言葉によって真実に近づく。言葉によって未来の世代と共に生きる。言葉を乱し、仲間内でしか使えない隠語のようにしている人々は、自分のしていることがどれほどの背信行為か気づいているだろうか。





アッラーよ、あなたの御名において、あなたに懇願いたします。

おお、唯一なるお方よ、 おお、すべてを有する者よ

おお、証言者よ、 おお、栄光ある者よ

おお、正しい方に導くお方よ、 おお、復活を司るお方よ

おお、相続させる者よ、 おお、英知によって害を与えるべきもの害を与える者よ

おお、益を与える者よ、 おお、導く者よ

あなたは完全無欠なお方、あなたに栄光あれ、あなたの他に真の神は存在しません。

私達を地獄の炎からお助け下さい。*



ゴマの焼き菓子

材料： 白ゴマ … 大さじ2 すり白ゴマ … 大さじ2 卵 … 1個
黒砂糖 … 50g 薄力粉 … 90g 重曹 … 小さじ1/2
サラダ油 … 大さじ2

1. 薄力粉と重曹を合わせて網を通し、振るっておく。
2. オーブンを180℃に予熱し始める。
3. 天板にオープンシートを敷いておく。
4. ボウルに卵を割りほぐし、黒砂糖を加えてよく混ぜ合わせ、振るった薄力粉を加えゴムベラで粉っぽさがなくなるまで混ぜる。
5. サラダ油を加え混ぜ合わせて、白ゴマ、すり白ゴマを混ぜ合わせる。スプーンで天板に10～12個くらいになるように落としてオーブンで12～15分焼き、ケーキクーラーにのせてしっかり冷ます。

*偉大なる鎖帷子 (ジャウシャヌカビール) には、祈願(きがん)、唱念、救いを望むことが記されています。それは、真の主アッラーの多くの御名を知らしめ、それらの御名と共にアッラーへ祈願し、近づく方法を示す大変貴重な意味深い書です。鎖帷子は戦いの時、身を攻撃から守るために着ます。人間の靈魂に授けられた善美を守るためには、偉大なる鎖帷子のような精神的鎧が必要です。本来、偉大なる鎖帷子 (ジャウシャヌカビール) が精神的世界のみではなく、物理的世界においても守りとなると伝えられています。



リダ(甘受)2*

第1段階のリダはすべての信仰する者の義務ですが、それは自由意思に関連し、アッラーの唯一性への信仰に必要なものであるため、アッラーに近づくための道の始まりと言えます。第2段階のリダは、第1段階の続きであり第3段階の基礎となるものだという理由から、また、それによってアッラーの近くにいるということを考えるようになることから、努力して得なければならないものです。

第3段階は、自由意思や個人の努力によって得られる状態というよりは、むしろアッラーからの贈り物であるので、義務でもなければ必要なものでもありません。しかしながら、それを得たいと誠心誠意望むべきものです。この段階は第1・第2段階を包含すると言えますが、それは、(完全な)リダを熱望し、それを得るために生きることがイスラーム的人生の本質と言えるからです。しかし、それを完全に達成することは、この熱望に対して与えられる贈り物です。つまり、第1・第2段階はアッラーの美名や特質に関連したことで、それらの影や導きのうちに旅することによって得ることができる一方、第3段階はそれらに対する報奨や悟り、輝きとして与えられるものと言えるのです。

次の章句はこれらすべての段階について示しています。『かれらへの報奨は、主の御許の、川が下を流れる永遠の園である。永遠にその中に住むであらう。アッラーはかれらを喜ばれ、かれらもかれに満悦する。それは主を畏れる者(への報奨)である。(聖クルアーン明証章 98:8)』同じことは預言者(彼の上に平安と祝福あれ)によっても述べられています。「アッラーが主であることに、イスラームが宗教であることに、ムハンマドが預言者であることに満足する者は、信仰の喜びを味わった。」

以下の考察がリダを得ようとする人々の感情や思考を導き、この旅路において直面する困難を克服し、現世的な衝動を制御するために役立ちますように。

* 人間は、この世という舞台上で上演されるアッラーのドラマの登場人物に過ぎません。そのため、私たちは常に平等あり、与えられた役割を創ったりする権利も権威もありません。個人に起こることは何であれ、アッラーによって予め定められたものであり、アッラーはこの世におけるその人の自由意思や行為、思考を考慮されて定められています。アッラーだけがこれを変えることができるのです。



* この文章が“Key Concepts in the Practice of Sufism”よりの訳です。

* 人がアッラーを本当に愛するならば、アッラーからもたらされるものは何であれ、歓迎しなければなりません。その英知や価値あるいはアッラーの目的を知るのがとても難しい出来事もあり、ときに私たちにとって良いことが悪い出来事の中に隠されていることもあります。『自分たちのために善いことを、あなたがたは嫌うかもしれない。また自分のために悪いことを、好むかもしれない。あなたがたは知らないが、アッラーは知っておられる。(雌牛章 2:216)』

* ムスリムとはアッラーに完全に服従した者です。そのため、このような者がアッラーのなさることに不満を感じるなどということはありません。信仰する者は他の人々を信じるものですが、それならばどうやってアッラーを疑うことができるのでしょうか。クルアーンでは他人を疑うことが禁じられています(勝利章 48:12)。とすると、アッラーとアッラーのなさることを疑うことはどれだけ悪いことでしょうか。出来事を含めてすべてのことはアッラーによって造られ定められたものであり、またアッラーの造られたものはすべて、それ自体もしくは結果として良いことであるので、ムスリムは心を平穩に保ち、常に楽観的であるべきなのです。

* 私たちの義務や責任が、私たちが耐え克服しようとする不運や困難と同様に、来世の永遠の幸福な人生に備えるための訓練や教育として重要な位置を占めるものだとしたら、私たちは進んでその義務や責任を果たし耐えるべきでしょう。アッラーからもたらされるものすべてに対するリダもしくは満足することは、その人にアッラーも御満悦であることを意味します。アッラーのなさることやアッラーが主であることの現れに不満を感じるということは、苦難や悲嘆、不安を引き起こすでしょう。一方、たとえ大きな困難に苦しまなくてはならなくとも、アッラーの御意思を甘受することによって、安心感や楽観さを得られます。つまり、絶え間なくリダを追求することによって、アッラーの援助を呼ぶことができるのです。

* 運命やアッラーの現れに対するリダは、幸福を得る手段としてとても重要だと言えます。これについて預言者ムハンマド(彼の上に平安と祝福あれ)は次のように明らかにされました。「アッラーの御意思にリダを示すことができるのは人にとって幸いなことであり、アッラーの御意思に対して憤りを感じることは不幸なことだ。」アッラーの御意思やなさりを甘受することで、心はアッラーの王国からのそよ風で満たされ、不満を抱くことで、心はシャイターンから来る出来心や疑いで満たされることになります。アッラーの御意思を甘受する人々は、自分の人生を感謝という金の糸の「刺繍」にするのに対し、不満を抱く人々は、自分の最も良い作品でさえ忘恩という石臼で粉々に挽いてしまいます。このような不満を示すことは、シャイターンによる魂の侵略の最も効果的な方法の一つなのです。

* 信仰する者はアッラーのなさることを歓迎することによって、楽園の住民に加われるかもしれません。それはアッラーから与えられた榮譽です。アッラーに満足する者は正しい導きに従っているのに対し、満足しない者は自分の幻想を追っているだけなのです。アッラーの御判断や御意思を甘受するということは、アッラーの望まれることを自分の望むことよりも好むということの意味します。逆の態度が何を意味するかは言うまでもないでしょう。

* リダは崇拜と信仰という実をつける樹木のある果樹園のようです。罪はリダを奪われたことの結果と言える

でしょう。リダは信仰する者の内面において、アッラーに対する葛藤を防ぎ、預言者(彼の上に平安と祝福あれ)の祈願に表された真理を尊重することを意味します。「あなたが私について下された評価は、どれも真に公正です。シャイターンが自分についてアッラーが評価されたことを甘受しなかった時、最初の罪が犯されました。」

* 人が得ることができる最高の報奨や地位は、アッラーが自分について御満悦して下さることであり、それはアッラーの御意思に対する自分のリダによってのみ得ることができるものです。これは樂園で得ることができる最善の報奨でもあります。『アッラーは、男の信者にも女の信者にも、川が永遠に下を流れる樂園に住むことを約束された。また永遠(アドン)の園の中の、立派な館をも。だが最も偉大なものは、アッラーの御満悦である。それを得ることは、至上の幸福の成就である。(悔悟章 9:72)』

* リダはイスラームの最も重要な本質、アッラーへの信頼に基づいています。その本質はアッラーの存在と唯一性についての確信によって知ることができます。それはアッラーの愛の中に埋め込まれていて、それによって人は永遠の幸福を得ることができるようになるのです。また、それはアッラーへの忠誠と真実に根ざし、実際の感謝を意味しています。リダは、手に入れた人はすぐに目的地へ到達することができる魔法のエレベーターのようだとと言えるでしょう。忍耐や悔悟と同じように、愛や誠実さはリダという環境に咲く花です。そのため、リダのない心やアッラーの御満悦を得ていない心に、そのような美德や性質を探しても見つかりません。

* アッラーの御満悦を得るためにした行動や言動に対して、どんなにたくさんの報奨を与えられたとしても、それは数え上げることができるものであり限られています。一方、リダとしてのこのような行いは心によってなすものなので、それに対して与えられる報奨は心の深さに比例したものであり、そのため測ることができません。

リダやアッラーの御満悦はアッラーから見て最高の地位であるため、預言者ムハンマド(彼の上に平安と祝福あれ)から全ての預言者、信仰の深い人々、純粋な学者たちに至るまで、誠意や確信、信頼、服従、自信というもので最終試験に合格した偉大な人々によって、リダは最終目的として追い求められてきました。彼らは多くの困難や障害を乗り越え、たくさんの堪え難い苦悩や苦痛に耐えてきました。次の詩はこのような人々のため息を描写しようとしたものです。

あなたに与えられる苦しみは幸運を得るよりも喜ばしく、

あなたに与えられる罰は私自身の魂よりも素晴らしく感じます。

私は彼に与えられる苦しみと喜びとの両方を非常に愛しています。

両極端のものをどちらも愛するとはなんと奇妙なことでしょう。

アッラーによって、この苦しみの棘から^喜歡喜の庭へと行くならば、

私はナイチンゲールのように常にうめき声をあげるかため息をついているでしょう。

ナイチンゲールが歌い始めたとき、その旋律が棘と薔薇の両方であるとは、
なんと奇妙なことでしょう。

次のナシミによる詩も美しいものです。

私は苦しみながら愛しています、おお愛する御方よ、私はあなたを諦めません。

たとえもしあなたが私の胸を短剣で貫いたとしても、私はあなたを諦めません。

たとえもし私がザッカリーアのように頭から足まで二つに切られたとしても、

あなたののこぎりを私の頭に当ててください、おお大工でもあられる御方よ、

私はあなたを諦めません。

たとえもし私が灰になるまで燃やされて、私の灰が吹き飛ばされたとしても、

彼らは私の灰がため息をつくのを聞くでしょう。

(罪を)覆い隠される御方よ、私はあなたを諦めません。

リダもしくはアッラーに満足しアッラーの御満悦を得るという段階は、他のすべての段階を含みます。ここで歌われる旋律はこのようなものでしょう。「あなたが私に何をしてくださろうと、どのようにあなたが私を扱われようと、すべてが良いことです。おおアッラー！あなたが愛するもの、御満悦を感じられるものへと私たちをお導きください。そして、私たちの指導者、預言者たちの長に平安と祝福をお与えください。」



信頼できるということ*

全ての存在に対して誠実であること

預言者ムハンマドは、預言者としての任務において、アッラーの送られたメッセージに誠実であったのと同様に、その誠実さはその精神にすっかり根をおろし、他の全ての存在に対しても誠実であった。

ある日、モスクにおられる時、妻のサーフィアが預言者ムハンマドを訪問した。しばらく座っていた後、自分の家に戻るべく帰途につこうとした。預言者ムハンマドは、妻を見送るために彼女と一緒に外に出られた。そしてまだ二人が何歩も行かないうちに、いく人かの教友たちが二人のそばから離れて行った。預言者はすぐに彼ら呼び止め、サフィアの顔を見せ「見なさい、これは私の妻のサフィアだ」と言われた。教友たちはショックを受けたようで「預言者よ！ どうしてあなたについて悪く思うことがあり得ましようか」と言った。

預言者ムハンマドは、常にそうであられるように、この振る舞いによってもあることを教えられようとしたのである。預言者は「シャイターンは、常に人間の血管に潜み、動き回っている」[†]とされている。シャイターンはこれほど人間に近いところにいるのであるから、人間の耳に何事かをささやきかけることは大いにあり得る。もし、万に一つでも、人が「預言者のそばにいる女性は誰だったのだろう」。などと考えるようになれば、その人は永遠の命を失い信仰の光を消してしまうことになる。そのために、この慈悲深い預言者は即座にその状態に介入され、御自身への信頼を守ると共に、信者たちの信仰をも、守られたのである。

そのお方は誠実であることと、信頼されることにこれほどの重要性を置かれていた。そもそもそのお方の、まだ預言者になる以前の呼び名も、信頼（アル・アミーン）であった[‡]。後に、このお方に対して無慈悲な敵となる人々でさえ、信頼できる人と認めていたのである。アブー・ジャハルに、名誉や誇りというものも含めて、最も大切なものを誰に預けるか聞いたならば、おそらくは「アル・アミーンに」と答えるであろう。最初に思いつくのは預言者ムハンマドのことに違いない。

預言者ムハンマドは、生涯を通して誠実な心を持たれていた。ある女性が、自分の子供を呼ぶために「おいで、ほらご覧、あなたにいいものをあげるよ」と言っているのを聞かれ、急いでそばに行き、言

* この文章は “Prophet Muhammad: Aspects of His Life- 1” よりの訳です。

† Bukhari, Itiqaf 8: Ibn Maja, Siyam 65

‡ Ibn Hisham, Sirah 1/209

われた。「何をあげるのですか」女性は「ナツメヤシの実をいくつかあげるつもりです」と答え、預言者は彼女に「もし、子供に何もあげるつもりがなかったのだったら、嘘をついたことになるどころでした」と言われた。

預言者ムハンマドは、嘘を不和の印とみなされていた。そのため、できる限りそれを避けようと言われていたのである。嘘は、偽信者の三つの印のうちの一つである。残り二つは、約束を守らないことと、信託を裏切ることである*。それらのことは、預言者ムハンマドからは遠い存在であった。

預言者ムハンマドの誠実さとその考えは、ただ人間にのみ向けられたものではなかった。全ての存在が、その対象であった。

ある教友が、馬をそばに寄せるために、あたかもその手に馬の食べ物を持っているかのように振る舞っており、この振る舞いは預言者の心を苦しめた。預言者はその教友を呼ばれ、叱られた。動物たちに対しても誠実でいなければならないことを教えられたのである。†

またある時、戦いから戻られる途中のこと。教友たちのいく人かが、鳥の巣から雛を取り出して可愛がっていた。そこに母鳥が戻ってきて、巣に我が子の姿がないのを見て激しく暴れ始めた。行ったり来たり、右に左にと飛び回っていた。預言者ムハンマドはその様子を知ると、すぐに、雛を巣に戻すことを命じ、鳥を苦しめないようにと言われた。そういう振る舞いは、この世の代表であるべき人々にはふさわしくないと教えられたのである。‡

預言者から溢れ出る光によって輝きを帯び、光の輪となった教友たちもまた、そのようであった。彼らの一人に、アブー・ウバイダ・ビン・アルジャッラーフがいる。彼はウマルの時代に、ダマスカスで知事をしてきた。ヘラクレイオスが、その軍隊と共に来て、ダマスカスを再び侵略しようとしている時、アブー・ウバイダの元にはほんのわずかしかが人がいなかった。そのため、町を守ることは不可能であったため、すぐにダマスカスの住民を集められた。そして彼は言った。「我々にはあなた方から税を集めた。その税に対して、我々にはあなた方を守る義務がある。しかし今、我々にはその力がない。だからあなた方を守ることはできない。それで、集めた税をあなた方にお返しする。これらを我々が持っていることは許されない」

こうして、集められた税はそれぞれに返された。この様子を見て驚いた神父や牧師たちは教会に集まり、イスラーム教徒たちが自分たちのそばにいてくれるようにと神に祈った。イスラーム教徒たちを見送る時も「願わくは、戻ってきて我々をヘラクレイオスの弾圧から守ってください」と言ったのである。§

アブー・ウバイダは、信頼できることを示し、誠実さをもって生き、キリスト教徒たちにも認めら

* Ibn Hanbal, Musnad, 3/447; Abu Dawud, Adab 80

† Bukhari, Iman 24; Muslim, Iman 107

‡ Abu Dawud, Jihad 112, Adab 164; Ibn Hanbal, Musnad 1/404

§ Abu Dawud, Adab 164; Ibn Hanbal, Musnad 1/404

れた存在であった。今日、西洋が我々の言うことを相手にせず、また我々がヨーロッパに送った人たちのメッセージにも耳を貸していないとすれば、それは全て、我々における不足のためである。そして、我々に不足するもののうち最も大きな問題が信用、信頼であることは疑いもない。我々がこれらをもう一度獲得することができた暁には、人間社会は信頼のおける人々を見つけたことになるだろう。国家間の上下という面でも、我々はかつての地位を取り戻すための最も重要な一歩を踏み出したことになるはずである。

オスマントルコ帝国の世界の支配においても、同様の誠実さを見ることができる。戦いに向かう際、通過する果樹園や庭からもいで食べた果物の代金を、その枝に結び付けておいたこの人々は、国々を剣で支配する以前に、この誠実さと潔さで、まず人々の心を制圧したのであった。そうでなければ、あの恐ろしい十字軍の物事の考え方に對抗する形でヨーロッパに入ることも、そこに居続けることも不可能であっただろう。

ダマスカスにあったアブー・ウバイダの規範は、4世紀にわたってバルカン人やヨーロッパ人の中で生き続けた。その結果、後にはるかウイーンまで行くこともできたのであった。そして行く先々で、信頼と誠実に重きが置かれたのである。共和制以降のトルコで、安全の確立のために流された血は、5世紀の間、しかも他民族との共生の確保のために流された血よりも多いのではないだろうか。いくつかの研究によると、600年続いたオスマントルコ帝国時代を通して、衝突や小競り合いで死んだ者の数は、この半世紀のうちに死んだ者の数よりも少ないそうである。だから、オスマントルコの支配が単に力によるものだという事は適切ではない。同時に、当時の移動・伝達手段^{かんげん}を考えるなら、これほど広い土地を一つの国家が支配することは、単に官憲^{かんげん}や軍の力のみでは不可能であることが明らかである。

彼らは、その心と精神でもって制圧を果たしたのであり、だからこそさまざまな民族に属する人々が、一つの国家の屋根の下に、しかも長い間に渡って大きな問題も起こさずままとまっていたのである。今日の献身的な活動をする人々に求められているのも、同じ方法、手段であるはずである。



講演会のテーマから

...テーマの中でとくに興味をひかれたのが、“言葉力”（あと、もし一言つけ加えてよいなら、その“トーン”）について。

クルアーンの真の意味を理解するのにこれなくしては不可能なのだと感じたときから、“言葉”の源、または元型のようなものを感じてみたい、感じなくては、と思うようになったからです。繊細な事を感じ取るハートがなければ言葉は生まれてこない（発せられない）はず...

そこで思い出したのが、初めてクルアーンを聞いたときのこと。なんだかわけのわからない言葉、音楽とも歌とも違うこの“物”に日本語にどっぷりつかっている私がハッとさせられ、その音（その時点では言葉がわからないので、私にとっては“音”です。）が内面でこだまし一瞬息が止まってしまったのを覚えています。あとはなんともなつかしい心地と不思議な感覚で聞き入ってしまいました。

これは素敵な音楽を聴いたときの感動とは違います。たしかに感動ではありませんでした。

なんだかわからないにもかかわらず、その発音とフレーズが内面の何かを動かしたのでしょうか... しかも、なんともいえぬ安定感のようなものと共に。

クルアーンのフレーズは人間の心（心のようなもの）に直結する
ための特別の言語、または響きのように感じませんか？

クルアーンという言葉、音、抑揚は、普通に生きているすべての人間
がもっているハートのための言葉、またはハートが表現したいことの言語化（音声化）なのではないかと
（ここでの“ハート”は、日常的な場面で浮き立つもの、ということではなくて、もっと深くに眠っている豊かな何かを記憶するもの）。そんな感覚を持ったあとにクルアーンを聞いたり、声に出して短いフレーズひとつでも言ってみると、頭で理解している意味とは別の意味が突然浮かぶことがあり、その印象を記憶しておく、そしてまた折りをみて聞いたり読んだりしてみる。

返事のようなものが出てきて、そしてその答え、返事に対して新しい別の課題や問いかけが加わってくるよう。



それが蓄積されていったものが、クルアーンで意味する“知識”といわれるものなのかもしれない、と思いをめぐらせ、別の感覚をたよりに手探りをしながら見えない意味を感じ取ろうとする。楽な作業ではないのでゆっくり、休み休み、何度も同じ言葉に向き合い問いを繰り返します。

まだ触れ始めたばかりのクルアーンの“言葉”に私が感じる魅力です。

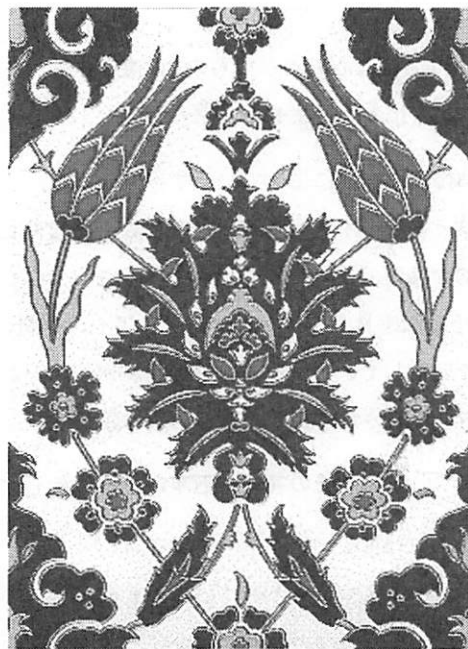
人それぞれ、その状況、知識によっていろんな答えを示してくれる、クルアーンの言葉（音）にはそんな、サポート力がしっかり織り込まれているに違いない、と感じる今日この頃なのです。

壮大なメッセージを言語化して伝える、という大変な使命をまっとうした預言者ムハンマド（サルアラーフ アライヒ ワ サラーム）のことを思い巡らすと本当にため息がでます。

まったく余談ですが、もし、私が、子供の頃からクルアーンを聞いていたら、決してこのような感覚で自分の感じ方を確かめることはなかったかもしれません。そこから内面に次々と湧き上がってくる問いかけに直面する機会も通り過ぎていたかもしれません。


“自分にとってのイスラームとは！”のような先入観も持っていなかったことは、ダイレクトにイスラームというものを受け止めて一から点検しなおそうとしてみる好奇心；マグネットのようなものをよい方向へ持っていこうとする、という点ではとても幸いだったと、ムスリムとして生まれなかった不幸中の幸いとして感謝を感じます。

言葉とハートのコネクション、これは私にとって長〜くつづくテーマのひとつになりそう。



年老いた人々へのメッセージ

11 番目の希望



捕虜から解放され国へ戻った後、私はいとこの故アブドゥルラフマーンと共に、イスタンブールのチャムルジャにある丘の上の別荘に住んだ。私のこの生活は、社会生活の点から見れば、私達のような人間にとって、もっとも幸福な生活だったといえる。というのは、私は捕虜の身から解放されたからである。「英知の館」で、私達は、私のすべきことにふさわしい大変高尚な方法で、知識を広げ、高めていくことに成果を上げていた。そこで、私に与えられた地位と栄誉は、私には則を越えたものであった。私は地理的には、イスタンブールの一番美しい場所である、チャムルジャに滞在していた。全てが私にとって完璧であった。私のいとこの故アブドゥルラフマーンは、大変知性豊かな、献身的な、私の教え子でもあり、奉仕家でもあり、書記でもあった。精神的には息子と感じていた彼と、私は一緒に過ごしていた。世界中の誰よりも私が一番幸せだと感じていた矢先、私は鏡を見て、私の髪や髭に白髪が混じっているのに気付いた。突然、捕虜の身となっていたコスツルマのモスクでの経験、「魂の目覚め」を、再び感じた。その結果、私が愛着を持ち、この世の幸せの原因だと思っていた今のこの状況を、再検討し始めることとなった。どのように検討してみても、深く考慮すると、それらは腐敗しており、関心を持つに値せぬ偽りであると知った。そのころ、もっとも忠実であると信じていた友人の一人が、信じられないほど忠誠心がなく、言葉では語るができないほど、不誠実であることを知った。この世の生活にぞっとしたものだ。私は「私はすべてのことを謝ってみてきたのであろうか。してみると、本来は哀れまれるべき私達の状況に対して、多くの人々が羨望を抱いているようだ。これらの人々はすべて気が違ってしまったのであろうか。それとも、私の気が違ってしまったので、この世を愛する人々が、狂人と見えてきたのであろうか。」と、自問自答していた。

ともかく、私は老いが私に齎^{いた}した深い目覚めによって、まず、はじめに、私の関心の的であったいづれ消滅するであろう無常なものを、無常であると理解したのである。そして、自分自身を見た。大変、無力な存在であると知った。その時私は永遠を望んだ。そして、永遠を想い、はかないものとりことなっている私の魂は、精一杯次のように語った。「そもそも、私の体ははかないもの、消滅するものである。この消滅するものは、私にどのような益を齎すのであろうか。そもそも私は無力である。この無力さに、私は何を期待しているのであろうか。私の悩みを癒してくださる永遠なる存在、完璧な力を備え、終わりも始めもない存在であられるアッラーが必要である。」と、私は、深く追求し始めたのであった。

突然、真の主の慈悲と寛容さによって、英知あるクルアーンの聖なる知が救助に駆けつけた。多くの便り（リサーレ）で、明らかにされているように、哲学的分野での汚点を洗い流し、清らかにした。

たとえば、科学と哲学によって、増殖される暗黒は、私の魂を万有の中に閉じ込め、おぼれさせてしまった。どのように、それらの観点から光を探し求めても、科学と哲学から光を見出すことは私にはできなかつた。一息つくこともできなかつた。ところが、英知なるクルアーンから齎された「彼のほかに神はない。」(注1)という御言葉によって教示された神の唯一性が、こよなく美しく輝く光として、暗黒のあらゆるものを消し去った。そして、私は容易に息をすることができるようになった。しかし、自我と悪魔が、暗黒の民達と哲学を信奉するもの達から得た教えを使い、私の理性と私の心に攻撃を仕かけた。この攻撃によって生じた自我との対話は、リッターヒルハムド(アッラーに称讃あれ)、私の心が勝利を得る結果となった。多くの便りの中で、それらの対話について、申し上げてきたが、それらを、さらに補完しよう。ここでは、心の勝利について1000の中の1つを示し、数多くの明証の中からその一つを明らかにして行くことにしよう。このように、若いときに、西洋哲学又は科学文明の名の元に、一部の者は暗黒、そして一部の者は無意味で無価値な事柄によって汚され、心は病み、自我は増長した。一部の老人達の魂が清められ、神の唯一性について、悪魔と自我の害悪から救われるように私は祈る。それは、以下のようである。

私の魂は科学と哲学の名の元に「自然に従うと、万有に存在するものは、他の存在を介在する。あらゆることには、原因がある。果物は木から、土から種がというように、原因をみいだそうとする。最も小さな物、意味のないものはアッラーから求め、彼にそれを望むが、それは何を意味するのであろうか。」



まさに、その時クルアーンの光によって、神の唯一性の意味が次のような方法で顕された。私の心は、哲学に傾倒していた私の自我に、こう語った。「もっとも小さく意味のないものと同様に、まさしく、この世のすべてのものは創造者であられるアッラーの御力によって生じ、神の宝庫から出現する。他に方法はありえない。原因とはある種の覆いである。もっとも小さく些細なものと思っていた被造物が、時として造形と創造の点から見ると、最も大きな被造物よりもより見事であることもある。ハエはめん鳥も造形の面ですぐれているとはいえないが、劣っているともいえない。その場合、大きいと小さいとかで区別はできないはずである。すべてのものが生じる原因は個々に分けられているか、又は単一な存在によって、瞬時に生じるかどうかである。前者は不可能であり、後者は必要不可欠である。

もし、全てのものが単一な存在によって生じるのであるなら、その単一な存在とは、終わりなき、全能な存在であろう。すべてのものは彼の命によって、構築された秩序と英知によって成り、その存在を確かに生じさせる彼の御知識は、あらゆる物を包含する。彼の御知識の範囲内において全ての数量が明らかになる。そして、目の前で、瞬時に無から、いとも容易に、この上な美しく造られる。全知全能なるその御方が、マッチをするように「クンファヤクーン」(「有れ。」と御命じになれば、即ち有る)という命に従い、どのようなものでも造ることができるということを、多くの便り(リサーレ)の中で明らかにした。とくに「20番目の手紙」や「23番目の光」の終わりの部分で、明らかにされたように、限りなき力は存在する。さよう、目の前に見える被造物すべては、比類なき方法で、容易に、その知識の広さと偉大な力によって生じるのである。



例えば、目に見えないインクによって書かれた本に、その本を見えるようにするための特殊な液をかけてみると、その大きな本は突然目の前にその実態を現わし、本自体が読めるようになる。と同様に、終わりなき全能な御方の御知識の範囲内で、すべてのものは形作られ、数量も決められ、明らかにされる。完璧な力の持ち主は「クンファヤクーン」という、限りなき無限の力と力強い神意によって、非常に簡単に、権能の一頁である力を、その本にぬられた液のように、本来の知識にぬると、その存在は実体化し、私達の目に見えるようになり、私達は、知識の繊細な美しさを読み取ることができるようになる。

もし、すべてのものが、一瞬のうちに終わりなき全知全能な御方によって、生じるのでないなら、それでは、はえのような最も取るに足らないささいな物の体でさえ、世界中の多種多様なものの中から選び、特殊な方法で集めまとめられなければならない。それと同時に、その小さな体のなかかにで活動している数多くの原子は、そのハエの創造の秘密と完璧な造形方法を、一秒ごとに把握しつづけなければならない。

なぜなら、明確な形で、全ての知識人の同意するところであるが、自然的原因や物質的原因による無からの創造は、不可能であるから。もし、可能であり、それらが創造するのであるなら、あらゆる被造物は確実に一斉に集め、まとまりの持った形に成したであろう。もしそれらが一斉に取りまとめられるというのなら、生き物を例にとりて見てもよいのだが、無数の基本と成る要素と数多くの種類が、その生き物の中に存在することとなる。万物の一要素は、一つの核によって司られている。その状態では、一つの核は一本の木の物質全てから、そして又、一つの生き物は、地表の全ての物質から、選ばれ、目の細かいふるいにかけられ、精密な測りによって計量され、収集され、統合されるべきである。又自然的原因は、無知であり、生命はなく、計画、目録、型、予定を決定する知識を備えていない。又その決定に従って、実体のない鋳型に、物質の元を入れ、溶かし、形作る事もできないし、ばらばらにせず、秩序を乱さないようにすることもできない。しかし、あらゆる物の形、型は無限に近く存在するので、その数限りない無数の様々な形や数量からたった一つの形と分量だけを選びだすことや、洪水のように流れ出る基本となる要素の無数の原子が散らばらず、正しく配列され、決まった量や型がないにもかかわらず、それぞれがまとまりを持って保たれることや、生き物を秩序にのっとして正しく配列された体を作ることは能力的にも、可能性から見てもまったくありえないことであるのは、明らかである。確かに、心の目が開かれているものはそれを知るのである。

さよう、この真実について、

「まことに、なんじらがアッラーのほかには祈るものは、たとえ彼らとその目的のため団結しても、一匹のハエさえつくれる。」〔巡礼章 2 2 章 7 3 節〕



の節の神秘によると、物質的原因が団結して、さらにそれらが強い意志を持ったとしても、それらは一匹のハエさえ全体的システムとそれぞれの器官をバランスよく作り上げることはできないのである。もしそれらをバランスよく集めることができたとしても、量を正しく分配し、それを保つことはできない。

たとえ、保つことができたとしても、常に新陳代謝を繰り返す諸々の原子は、規則正しく働きつづけることはできない。つまり、真の所有者は、他に存在するということになる。

「なんじらの創造も復活も、一個の魂のようなものにすぎない。」(ルクマーン章31章28節)の節の神秘によると、彼は一匹のハエを簡単に生き返させるように、地上の全ての生き物も生き返らせることができる。

彼は一本の花を簡単につくるように、春もまた造り給う。なぜなら、かれにとって、各々の物質を一斉に収集するという作業は不必要であるから。彼が「クンファヤクーン」という命の持ち主であられるので、そして又、毎春、顕れる無数の被造物を、物質的要素以外にも、それに備わる数々の属性、状態、形を無からつくり給うので、そして又、彼のみ知識によってすべてのものの計画、型、目録、予定を決定したまうので、そして又、全ての原子は、彼の御知識の範囲内で活動しているので、彼はマッチをするように、あらゆる物を大変容易に創造し給う。そして、どんな小さな動きにも決して混乱することはない。よく訓練された軍隊が、秩序整然と並んでいるように、原子もまた命令に従順な軍隊のように、正しく動く。その動きは、永遠なる御知識の原則を一致し、永遠なる力と機能に基づいているので、それらの作品はその力によって実在化する。それゆえ、その小さな些細な個々を見て、その作品の価値が低いと判断することはできない。その御力と結びつく力を通して一匹のハエはネルムードを殺すこともできるし、ありはフィルアウンの宮殿を破壊することもできる。粒のように小さい松の種が、山のように大きな松の木の重荷を荷うこともできるわけである。この真実を多くのリサーレの中で解説してきた。軍隊へ入隊し、王の命令に服する兵士が、彼自身より何万倍も強力な王を捉えることができるように、すべてのものは、永遠の力との結びつきによって、自然的原因の力を何万倍も超えるような見事な奇跡的な作品を明示することができるのである。



端的に申し上げれば、すべてのものは非常にたくみに容易に実体をあらわすが、それらは、すべてを包含する知識を備えた永遠で全能な神の作品であることを示している。さもなければ、数多くの困難さの中で、実在化することは、可能性の域から不可能な域へ突入することとなり、可能な形から不可能な存在へ変化し、ただ実在化ができないだけでなく、実在化に反することになるからである。

この最も鋭敏で、力強い、意味深い、そして明らかな証明によって、悪魔の一時的な弟子となり、逸脱した者達や哲学者達の代弁者となった私の魂は、口を閉ざし、リッラーヒルハムド [アッラーに称えあれ]、完全な信仰を得た。そして、再び口を開いた。

さよう、私が心の中で思った些細なことや、心の中の密かな願いなどを知る力を持つ創造主が、私には必要である。彼は私の心の潜在的必要性に応えるかのように、私に永遠の幸せを与えるために、巨大な世界を来世に変え、現世を一掃し来世を代わりに造り給う。彼はハエを造り給うたように、諸天も創造し給う。

そして又、彼は太陽を空の目として配置し給うたように、一つの原子を、私の瞳の中に配置するこ

ともできる。そうであるから、一匹のハエを造ることのできないものは、私の心の中で考えたことに介入することはできないし、私の魂の祈りを聞くこともできない。諸天を創造できない者は、永遠のしあわせを私に与えることもできない。だが、それらのすべてが、私の主には可能である。彼は私の心の思いを清め給う。そして又、彼は空を一時間内に、雲で覆い隠したり、消したりするように、現世を来世に変え、天国を造り、その扉を私のために開き、「さあ、おはいいなさい。」と、おっしゃることも可能である。

私の自我のように、不運にも、光のない西洋の物質主義を信奉する哲学や科学の元で、一時期を過ごされた、老いた私の兄弟達よ、クルアーンの御言葉が、絶え間なく、伝える「彼のほかに神はない。」(5章22・23節、2章255節等)の聖なる勅命によって、非常に力強く、英知にあふれ、どのよう点からも揺るがされることなく、傷つけられることもなく、変化させられることもない信仰の本質を理解なさるように。それは、どのような精神的暗黒も消散させ、どのような精神的傷をも治すことができる。

この長い珍しい話は、私の「老いの希望」の扉の中に含まれているかのように見えるが、

私がそう望んだわけではない。おそらく、みんなが飽きてしまうのではないかと思い、書き記すのを私はためらったのだが、それをやむなく書かされたとは私は感じている。ともかく、本題に戻ろう。

髪と髭に白い毛を見出し、そして、忠実な友人の中に不誠実さを見出したので、私は華麗な見栄えのよい華美なイスタンブールの現世的生活の楽しみに嫌気がさしてきた。私は自我がとりつかれた楽しみの代わりに精神の満足する喜びを探し始めた。この迂闊^{うかつ}な者達にとって、冷たく重苦しく不愉快に見える老いの中に、ある種の慰め、一筋の光を私は求めた。「そして、アッラーに讃えあれ」と、真の主は何万もの感謝を捧げた。全て真実のうち、あじけない、尽きることの内現世的な楽しみの変わりに、真の常に味わいのある、精神的喜びを「彼のほかに神はない。」の中に、神の唯一性を信じることによって得られる光を発見したかのように、迂闊な者達にとって冷たく重苦しく見える老いを、神の唯一性という光によって、非常に軽く、暖かく、光に満ちたものとして捉えることができるようになったのである。

ご老人、ご老婦の方々よ、あなたがたには信仰があり、信仰を輝かせ、向上させることができる礼拝と祈りがある。老いを永遠の若さと捉えることが、あなたがたにはできる。

というのは、それによって永遠の若さを得ることが可能となるのであるから。真に冷たく重苦しく、醜く、暗く、苦難な老いとは逸脱した者達の老いである。それだけではなく、彼らの若さもそのようである。彼らは嘆き悲しむべきであり、彼らこそ「ああ、しまった。」と、ため息をつき、後悔するべきである。あなた方のような、尊敬されるべき信仰を持つご高齢の方々は、「あらゆる状態に感謝し、アッラーを讃えます。」と言い、喜びながら感謝すべきである。



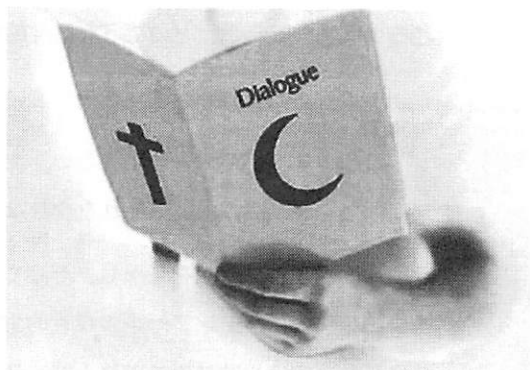


共通する言葉～イスラーム教徒とキリスト教徒の間で

The Fountain / Issue 56, by メスット シャーヒン

通常、イスラーム教徒とキリスト教徒の間で、2つの信条の共通基盤を見つけるために行なわれる対話では、双方にとって不可欠であるいくつかのポイントに焦点が合わせられます。この対話はいつも熱い賛辞と肯定的な所見で締めくくられますが、それぞれの側が対立する形で持っている重要なポイントへの見解を、相手に伝えることにおいては、成功していないのです。

私たちは、成功をひそかに妨げている主要な要素が、相手側が主張する信条に関する知識の不足であると考えています。知識の不足は誤解と事実誤認につながります。片方の側によって用いられる概念と用語が、もう片方には異なって認識されるなら、これらの異教徒間の対話から大した生産性を期待することはできないでしょう。したがって、この文章では、十分理解されておらず、そのため対話への試みの成功を妨げている、キリスト教徒・イスラーム教徒双方の信条における主張について考察したいと思います。



完全なリストではありませんが、十分なコミュニケーションが取れていないと思われる主なポイントは次のとおりです。

1. 「アッラー」は、聖書における神と同じ神か。
2. 三位一体とタウヒード（神の同一性）について。
3. イーサー（イエス）の神性と、預言者性の概念。
4. 聖典（旧約聖書・新約聖書）の真実性

ここでは、これらの4つのポイントに、簡単に触れていきたいと思います。

「アッラー」は聖書における神と同じ神ですか？

このような対話の場で、キリスト教によってしばしば尋ねられる問いが、「アッラー」という語が、聖書で言及される神と同じ神を示すのか、というものです。この問題に対する答えは、双方で異なります。

イスラームの教えによるなら、天と地を創造され、預言者を遣わされるお方については、クルアーンと同様、聖書においても言及されています。したがってイスラーム教徒にとってこの問いへの答えは、疑いもなく「はい」なのです。

一方で、キリスト教徒が同じほどの熱意を持ってこの答えを受け入れると予想することはできません。それは彼らにとってクルアーンを認めることになるからです。

聖書における神の美名や属性についての言及は、クルアーンで多く見られるそれや、預言者ムハンマドへの言及と比較すると、ほんのわずかです。この属性や美名が同じであるという事実にもかかわらず、キリスト教徒の神への認識は「目には目を」を命じる旧約聖書の神から、新約聖書に提示された非常に情け深い神とで変化します。キリスト教が「神」という言葉を聞いて即座に思い浮かべる神とどのようなものでしょうか。それらは旧約聖書におけるものでしょうか、それとも新約聖書におけるものでしょうか。

[Lord] (主) という語が、キリスト教においては時として「イーサー (イエス)」の意味で用いられることは、ことをより複雑にします。このように、イスラーム教徒とキリスト教徒の間の対話においては、双方は「神」という概念、まさに第一の信条に関する概念において差が生じていることがあります。このテーマにおいてコミュニケーションをとるための鍵は、聖書とクルアーン双方における、そこに言及された神の美名や属性について議論することでしょう。創造主についての記述の類似性は双方を驚かせ、両方の啓典で同じ神が言及されていることを明らかに示すでしょう。

三位一体とタウヒード (神の唯一性)

三位一体という概念は、しばしば、宗教をよく知っている人をも含め、イスラーム教徒によって誤解されるものです。多くの場合それは three Gods として認識されます。しかし周知のように、キリスト教は唯一神信仰を説く教えであり、多神教ではありません。

混乱は、三位一体における神格の概念に、三つの異なる属性があるという事実から生じています。

しかしキリスト教信者にとって、これらの三種の属性は、異なる段に属する同じ神性の存在の顕現のようなものなのです。聖書の、最もよく引用される節のうちの一つでイーサー (イエス) は語っています。「父と私は一つである。」したがってキリスト教徒にとってイーサー (イエス) は、地上における神の顕現なのです。これがイスラーム教徒とキリスト教徒の間の、イーサー (イエス) のあり方に関する多くの意見の相違のベースとなっているものかもしれません。しかしこの事実は、キリスト教を多神教とするものではないのです。

ある意味でこれは、対話への活動にとってよい知らせです。最も重要な信条、すなわち神が唯一であるという事実は、双方によってシェアされていることを意味するからです。神は天と地の創造主であられ、全能で全知で、永遠で、私たち皆が崇拝する神であられるのです。

神の唯一性は、この二つの世界宗教で共有される唯一の信条ではありません。非常に長いリストができるでしょう。大部分のキリスト教の宗派において、神は最後の審判の日に我々の行為を裁かれ、我々に永遠の命を用意されておられます。善は報われ、悪は罰されます。しかし私たちは皆、自分の行為もしくはは崇拝行為以上に、主の慈悲に対して望みをかけています。来世や最後の審判の日の概念は、神の唯一性に続く最も重要な、双方の共通事項といえるでしょう。

イーサー（イエス）の神性と預言者性の概念

多くのイスラーム教徒は、イーサー（イエス）の神性がキリスト教において、ほとんどの宗派でどれほど中心的なものであるかを理解していません。イスラーム教徒の話者が、彼のスピーチの冒頭で、イスラームの教えがイーサー（イエス）にどれほど敬意を示しているかということ、彼を最も偉大な神の使いの一人と見なしていることを主張することはそれほど珍しいことではないでしょう。イーサーを神性を持たない存在と見なすことは、キリスト教徒にとって大きな冒瀆です。イスラーム教徒がそれを受け入れないのと同じレベルで、キリスト教徒にとってイーサー（イエス）が神の最愛の息子としてこの地上に送られ、信者の罪のあがないのため十字架にかけられて死んだ、ということは重要な信条であり、キリスト教においてそれは三位一体と同じくらい中心的な信条でもあるのです。イーサー（イエス）は実は私たちと同じ人間であったということを認めるキリスト教徒、あるいは、実は^{はりつけ}磔にはされなかったと認めるキリスト教徒は、大多数の教会においては正当なキリスト教の教えを捨てた人と見なされるのです。

一方で、イスラームにおける預言者性への敬意、よく知られた預言者であれ、そうではない預言者であれ、預言者たちに示される敬意は、キリスト教の精神においては共有されていません。旧約聖書は預言者達の罪の行為を多く述べています。クルアーンにおけるそれと対応する記述に対し、旧約聖書で見られる物語で現されている預言者たちの生き方は、神によって選ばれた者らしくありません。したがってキリスト教徒が、イスラーム教徒と同じくらいの深い尊敬を、預言者たちに対して抱くことは、非常に難しいのです。そのため、イーサー（イエス）を、キリスト教徒との共通基盤を見出すための預言者と見なすことは、二つの理由によって逆効果となるでしょう。第一に、キリスト教徒は神性未満の何ものをもイーサー（イエス）には受け入れないからです。第二に、預言者性というものは、キリスト教徒にとって、イスラーム教徒が認めているほど尊いものではないからです。

この問題における共有できる部分はどこでしょうか。先に述べたように、イーサー（イエス）の神性はイスラーム教徒によっては決して認められるものではありません。またキリスト教徒たちは彼を預言者と呼ぶことを受け入れないでしょう。イスラーム教徒側のより建設的なアプローチとしては、おそらく、イスラームがイーサー（イエス）を約束されたメシア（マシーフ）として、そして神の言葉であるとして認めていると強調することでしょう。

「マルヤムの子マシーフ・イーサーは」「かれの御言葉であり」（婦人章第171節）

そして、彼が聖なる霊によって強められたと述べられていると示すことでしょう。

「聖霊でかれを強めた。」（雌牛章第87節・253節）

実際イーサー（イエス）は、クルアーンにおいて他の預言者たちの間で非常に特別な位置を占めているのです。

旧約聖書・新約聖書の確実性

聖書のどれ位が、どの部分が神によって示唆されたものか、という点においては、キリスト教徒たちの間で多様な意見があります。聖書における全ての言葉が神によって示されたものだと思える人から、イーサー（イエス）の言葉である部分は赤い字で印刷されているので、それ以外の部分よりは大事だと見なす人まで、多岐に渡る意見が存在します。

大部分のキリスト教徒は、たとえ赤い文字で記されたイーサー（イエス）の言葉が新約聖書の中でわずかしは見られなかったとしても、聖書全体が神によって示唆されたものだ、という意見を持つでしょう。この意見には同意しない人たちも、少なくとも聖書はよいガイダンスであると見なしているのです。

いずれにしても、どれが神の言葉であるかという定義や、どれが示唆されたものであるか、どれが神のメッセージを伝えた人の言葉であるか、という定義は、個人的なレベルにおいてキリスト教徒の信条の中で重要なものではありません。重要なことは聖書は何千年もの期間にわたって多くの執筆者によって記され、彼らが皆互いを認めている、という事実なのです。聖書をよい導きとしているものはこの事実なのです。

しかし、イスラーム教徒にとって、宗教が信憑性の疑わしい情報によって成り立つことは、容易に受け入れられることではないのです。全ての言葉が神によって啓示されたと信じられている聖クルアーンと、預言者ムハンマドの人生から読み取られる模範のみから、宗教的規則を得ることができるのです。

従ってイスラーム教徒はここでも、キリスト教の聖書の信憑性に対し、厳しい批判を持ってアプローチすることになります。一般にキリスト教徒は、聖書の一語一語に信憑性が見出されることを必要とはしていません。実際彼らは、66人もの異なる執筆者によって記された聖書においてそれはほとんど不可能だと考えているのです。

本のいくつかの部分が、その布教に専念した聖なる人々の言葉であったり、手紙の形であったり、それらが神の言葉の中に混ぜられていることは、当然よく予想されることであり、また受け入れられるものなのです。

一語一語を検討していくということは、キリスト教徒にとってはイスラーム教徒の友達と議論する時のみ接する新しい概念であり、だからこの問題でイスラーム教徒がキリスト教徒の心に挑もうとすることは、キリスト教の他の信条基盤への働きかけ以上の意味は持たないものとなります。

この点におけるより建設的なアプローチは、キリスト教の根本的な教えがクルアーンの教えにおいても共有されているという事実を指摘することでしょう。

ムーサー（モーゼ）の十戒は、クルアーンの最初の教章で詳しく述べられています。イーサー（イエス）が、相手が誰であろうとその人に愛と慈しみを示し、その社会において最底辺にいた人々をも包括する吉報をもたらしたことは全て、預言者ムハンマドによって説かれています。

彼らの教えの精神をとおし、かつ、彼らの言い回し以外の表現で、聖書とクルアーンの間の類似性を協調することは、聖書の信憑性を精細に調べることよりもはるかに建設的なアプローチです。我々のキリスト教徒の友人がクルアーンにより深い敬意を抱いてくれることが予想されます。

用語の選択

さらに、用語の選択の単純な誤りが誤解を生じさせる場合があります。英語の同じ言葉が、全く異なる概念をキリスト教徒、イスラーム教徒それぞれの心に思い起こさせることがあります。英語における聖書的な言葉は、それを話す人々の心において長い歴史を持っているのです。クルアーンの英語訳において聖書的な言葉が使用される時、それに含まれる概念が十分に表されることは不可能でしょう。

例えば、[grace][Lord][saint]といった言葉は、キリスト教の伝統に根付く深い意味を持ちます。これらの言葉はアラビア語の[ihsan][Rab][wali]という言葉の訳として使われることがあります。しかしこれらの英語とアラビア語は、正確には同じ意味を持ってはいないのです。[rububiyah]といったようなイスラームの概念は、一語に訳すのは不可能でしょう。

誰かが、これらのイスラーム用語を訳すために造語を使うなら、その訳は本来の教えの味わいと読者の心に及ぼす力を失うでしょう。一方、聖書的な言葉が使用されたとしたら、それらの言葉における聖書的な含みが理由となり、キリスト教徒の心を掴むことができないでしょう。

だから、イスラームの概念をキリスト教徒に伝えるうえでは完璧な翻訳が必要だと考えるべきではないでしょう。歴史をとおし、多くの文化においてもそうあってきたように、イスラームがネイティブスピーカーの間でもよく理解されるような独自の語彙を英語において確立するには、長い時間が必要となるでしょう。西洋におけるイスラーム教徒の短い歴史を考慮するなら、特に英語を話す国におけるイスラームメディアの成長とその流通は、とても励みになるものといえるでしょう。

終わりに

対話のための誠実な努力は、相手の信条の基礎や、彼らにとって大切なことを学ぶことから始められるべきです。私達の意見では、キリスト教徒とイスラーム教徒との対話においてここで示した4つのポイントにおいて慎重に振舞われるなら、それはより建設的、生産的なものとなるでしょう。

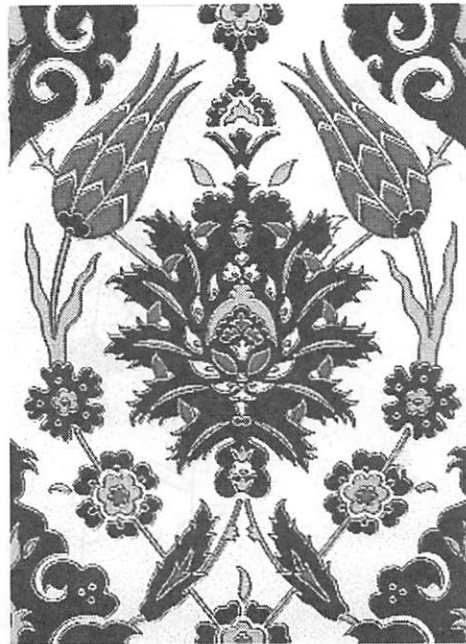
まずイスラーム教徒は、イーサー（イエス）について言及する時、十分に気を使う必要があります。イーサー（イエス）はキリスト教の預言者であるだけでなく、キリスト教がその上に構築されている、キリスト教徒にとって全てであるといえるのです。イーサー（イエス）を預言者と呼ぶことは、キリスト教のまさしく基盤を攻撃することであるのは明らかであり、それは避けられるべきです。さらに、三位一体はしばしばイスラーム教徒に誤解されている概念です。

しばしばイスラーム教徒によって指摘されるように、キリスト教の牧師はそれを自分たち自身に説明する点でも苦勞しているのは事実です。ただしこれは、三位一体、特にイーサー（イエス）の神性がその信者たちにとって取るに足らない問題である、ということの意味するものではありません。逆に、それはとても大切なものであり、キリスト教徒は疑問を抱くことなくそれを心に抱いているのです。それは論理ではなく、信条なのです。だからイスラーム教徒は論理でこの点を説明しようとするべきではありません。キリスト教徒と共通の基盤を見つけるといふ観点からは、ここで得られるものは何もありません。もしここで主張を行うならば、それは関係を壊すものとなるでしょう。

またキリスト教徒側は、イスラーム教における一定の概念、特に預言者性、神の特質、神の美名といったものに注意を払うことを彼らの課題とすることができるでしょう。彼らがイスラームを学ぶなら、キリスト教徒と比べ、イスラーム教徒の心において預言者がはるかに高い地位にあることが明白となるでしょう。

またクルアーンで言及されるアッラーの属性も、聖書にみられるものと異なっておらず、ただ聖書よりもクルアーンにおいてより多く、神がどのようなお方かという情報が存在するのです。イスラーム教徒が、旧約聖書に出てくる預言者に対して持つ信仰、そしてイーサー（イエス）の再臨に対して持つ信仰は、キリスト教徒がすぐに見出すことのできる2つの重要ポイントでしょう。

先のリストであげたことよりも前に、これらのポイントについて考えることが、対話を成功させるためのよい出発点といえるでしょう。





「ストーリー・オブ・ラブ」 The Story of Us

新しい一年が始まりました。新年最初の『やすらぎ』のテーマは「コミュニケーション」です。コミュニケーションは、人が人と暮らしていくためには必須の要素ですが、大体いつも不足しがちで、それが色々な問題を生み出すものです。私も友達から言われたことなどを自分なりに解釈した結果、互いの思っていたことがまったく食い違っていたことがしばしばあります。人間関係は難しいですね。では、どうしたら問題が解決するのでしょうか。

コミュニケーション不足から生まれる問題は、もちろん「コミュニケーションをとる」しか方法がありません。今回ご紹介するのは、コミュニケーションが全然うまくとれなくなった一組の夫婦のお話です。

結婚15年目を迎えるベン(ブルース・ウィリス)とケイティ(ミシェル・ファイファー)。子供も二人いて仕事もあり、順調で幸せそうに見える夫婦だが、二人の間では倦怠期を迎え、互いに対する不満がつのっている。些細なことでも相手が嫌に思え、ついには子供達のサマー・キャンプ中に別居を試みることに。

しかし、一人になってみると、思い出されるのはかつての愛のある幸せな日々のことばかり。その頃の気持ちはどこへ行ってしまったのか、悩む二人であった…。

普通の夫婦の、何と言うことは無い仲違いの話で、興行成績もイマイチだったようなのですが、しみじみ響いてくることもあり、私はとても気に入っている映画です。

夫婦(や恋人)が一番身近な他人で、それゆえになかなか難しいものです。お互いよく話をし、色々なものを共有しあわなくてはやっていけないような気がしますが、それがなかなかうまくいかない。映画の中ではケイティが、話をしているものの、うわべだけであるベンに切れて「それは会話と言わないの！それは関係を続けるためだけのものよ！」という台詞があります。話をしなくても、言葉が無くても分かり合えるという域に達していたら、それはそれで素晴らしいと思うのですが、そこまで行けない私などは話をするしかありません。しかし、それはただ話をするだけではなく、きちんとお互いが「話す」必要があるのです。何と言った方がいいか難しいですが、ただ話すのでも、ただ聞くの



でもなく、会話をする、それこそコミュニケーションを取るということなのでしょう。なかなか時間が無かったり、何かをはっきりと言うのが怖かったりしますが、どんどん関係がおかしな方向にいくのが止まれば幸いです。

もちろん、言葉以外のコミュニケーションの方法はたくさんありますが、その全てに共通するのが「思い遣り」ではないでしょうか。会話はしばしばキャッチボールに喩えられますが、それはその通りで、こちらからは相手が受け取りやすいように投げ、そしてこちらも相手からのボールを受け取る体制をとって待つておくという、この気の遣い方が重要になってきます。取れない様に投げるのが目的だったり、争う事が目的ではないわけですから。この気遣いを忘れてしまうと、忘れた側はまだ良いですが、忘れられた側に不満が溜まって、いつか爆発する事になりそうです。そんな事になる前に、どうにかしていい球を投げられるように、またいい球を投げてもらえるようにしたいものです。

余談になりますが、映画の中で、ケイティはベンからよく行く中華料理屋のスプーン(レンゲ)をプレゼントされました。当時はそれをものすごく喜んで、特別なものに思っていたのですが、あるときからそれは「ただのスプーン」になってしまいました。特別なスプーンがただのスプーンになった時、幸せな時間もただの過去になってしまったのでしょうか。「いつからただのスプーンになってしまったのかしら…」とため息をつくケイティ。しかし、そのスプーンがただのスプーンではなかった時の事は覚えています。…楽しかった思い出など、仲が悪いときに思い出すと本当にイヤになるものです。何もかもが馬鹿馬鹿しくなったり、変わってしまった(ように思える)相手に対する不満でいっぱいになります。ですが、本当は自分の相手に対する気持ちが変わっただけなのかもしれません。本当は、別の所に原因があるのかもしれませんが。それゆえ、少なくとも良い思い出だけでもあれば、そしてそれを正面から受け止めて、関係を直そうという努力をする気があれば、人との関係のねじれはどうにかなるのではないのでしょうか。…本当にどうにかなるかどうかはわかりませんが、私はそう信じたいと思っています。

あなたにとってのレンゲは何でしょう？ 大事な人との大事な思い出は何ですか？

人とのコミュニケーションは取れていますか？ あれこれと振り返って、この一年の糧にしていだければと思います。

「ストーリー・オブ・ラブ」 1999年 アメリカ 96分

監督:ロブ・ライナー

出演:ブルース・ウィリス(ベン) / ミシェル・ファイファー(ケイティ) ほか



使うためにあるものを、使わないようにする時

過去の歴史の中で、沈黙の価値について語った人はたくさんいます。言葉に頼ることが多い都市生活で、しばしば私たちは言葉が通じないことよりも、話しすぎてしまうことで人を傷つけたり、仲たがいをしてしまったことの方が多様な気がします。その反対に、相手を傷つけないように、相手の意見を尊重して言葉を慎むことで、互いの信頼関係を守ることもあります。私たちは言葉を口にしたなり、書いたりして使いこなしていますが、これを慎むことでよい結果が得られることがあるというのはとても興味深いことだとは思っています。

最近、実際にあったことですが、私の友人がわたしの仕事のやり方について「君はもっとこうするべきだよ」とアドバイスをしてくれたのですが、自分の考えを試したいと思うあまり、彼のアドバイスを真剣に聞くことができず、彼をがっかりさせてしまいました。その数日後、私はふと彼の言ったことを思い出したのですが、静かに一人で考えているうちに彼のアドバイスの方が正しいことに気づくことが出来たのでした。

私は、自分のアイデアを試したいという気持ちから距離を置くことで、彼のアドバイスを正しく理解することができました。

私たちの日常生活はそのようなことが溢れているように思えます。私たち人間は生まれながらに様々な能力を神より与えられています、その能力を使いたいという気持ちを潜在的に持っているように思います。例えば、食事を取る一つをとっても、食欲に後押しされて、私たちは物を食べるという能力を発揮するわけです。そして、その意味で「私たちは与えられた力を使って生きている」と言えます。

しかし、先述の話からは別の真実が見え隠れするように思えるのです。それは、「時に、私たちは与えられた力を使うことを控えることによって、良い結果を得ることができる」というものです。「私たちは与えられた力を適切に使うことで、・・・」と言い換えてもいいかも知れません。

もしそうだとすれば、アッラーによって与えられた能力の数だけ、私たちはそれを使うことを控えることも覚える必要があるのかもしれない。私は、「理性」の本質がここにあると思います。与えられた能力をあえて使わないようにする点で、人間は神が創り出した他の被造物と大きく違うことを感ぜざるを得ないのです。

購読価格（郵送料込み） バックナンバーは、1部 200円（日本以外は1部 250円）

国内： 1ヶ月 250円、 6ヶ月 1300円、 1年 2500円
国外： 1ヶ月 300円、 6ヶ月 1600円、 1年 3000円

郵便振替口座番号: 00100-6-354012 口座名義: 月刊誌やすらぎ

三菱東京UFJ銀行 店番号: 630（春日部）口座番号: 1134374 口座名義: 月刊誌やすらぎ
皆様のご意見、ご感想、ご質問をこちらのコーナーまで心よりお待ちしております

<http://www.yasuragiweb.com> info@yasuragiweb.com yasuragi_nihon@hotmail.com

〒168-0074 東京都杉並区上高井戸 3-10-6, 404
「やすらぎ」編集部